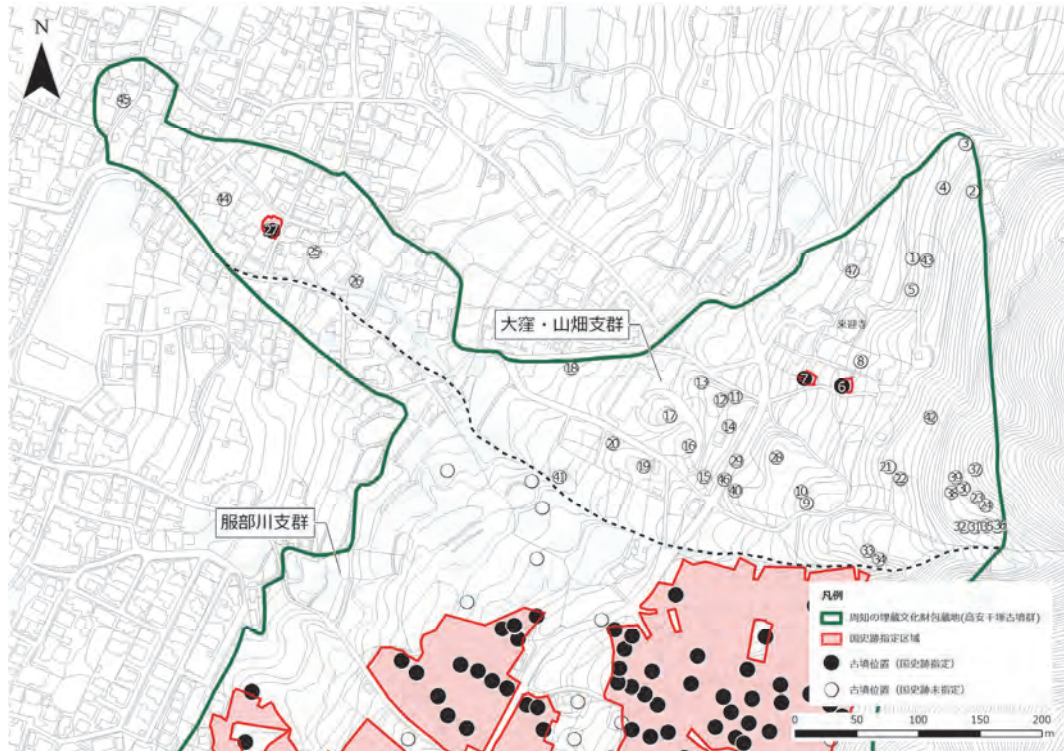


第2節 大窪・山畑支群

(1) 支群の概要



大窪・山畑支群は、谷筋を流れる北の片石谷と南の服部川にはさまれた支群である。標高120～134mの北西方向に延びる尾根上に立地し、眺望に優れている。

支群の約 11.4 万 m²の範囲に 50 基の古墳を確認している。服部川支群と同様に、植木畑を中心とした畑や山林に古墳が分布する。また、来迎寺境内の



図 3-15 大窪・山畑 6 号墳からの眺望（東から）

墓地の中に、6 世紀前半の大窪・山畑 6 号墳、6 世紀中葉の 8 号墳、6 世紀末の 7 号墳と支群の造墓期間を通じた代々の古墳が残されている。墓地南側の樹林の中にも古墳が分布しており、墓地になる前は、こうした樹林の中にあった古墳であったと考えられる。また、山麓部の急斜面地の山林にも一部古墳が分布する。

さらに、支群西端の服部川下流域にかけての住宅地内に大窪・山畑 27 号墳（しゅんとくまる俊徳丸鏡塚古墳）を含む 4 基の古墳が点在しており、古墳時代は多数の古墳が分布していたと考えられ、支群の範囲を検討する上でも重要である。

（２）史跡指定地の状況

史跡指定は、計 3 基の古墳で、指定面積は 334.4 m²である。支群内で指定された古墳の概要は表 3-2 のとおりとなる。

指定のうち 2 基が来迎寺境内の古墳で、そのうち大窪・山畑 6 号墳と 7 号墳の 2 基の古墳が史跡である。7 号墳は、墓地に入る通路になっており、羨道のみが残る特徴的な形状から「ぬけづか抜塚」とも呼ばれ、高安千塚古墳群を代表する大型横穴式石室の一つとして紹介されてきた。また、8 号墳については市指定史跡である。

そして、もう 1 基の支群西端に位置する大窪・山畑 27 号墳は「俊徳丸鏡塚古墳」とも呼ばれ、浄瑠璃や歌舞伎で有名な俊徳丸の墓という伝説から、有名な歌舞伎役者が寄進した手水鉢等の石造物が残されるなど、古くから著名な古墳である。

大窪・山畑 6 号墳は、石室が崩落の危険性が高いため、平成 19 年度に開口部を封入し、見学不可としている。7 号墳は市指定史跡の 8 号墳とともに、古墳群の普及冊子に紹介し、来迎寺の境内に説明板を設置し、活用を図っている。27 号墳については、古くから知られていたことから、見学者も多く、説明板を設置して活用している。

大窪・山畑支群では、計 50 基中 3 基の史跡指定にとどまっており、今後、支群の状況把握に努め、追加指定を検討する必要がある。



①来迎寺境内の墓地内の大窪・山畑 6 号墳



②来迎寺境内の墓地内の大窪・山畑 7 号墳（抜塚）



③来迎寺境内の史跡説明板



④俊徳丸ゆかりの大窪・山畑 27 号墳（俊徳丸鏡塚古墳）



⑤住宅に隣接する大窪・山畑 27 号墳（俊徳丸鏡塚古墳）



図 3-16 大窪・山畑支群の主な古墳

表 3-2 大窪・山畑支群 史跡指定地の古墳

凡例				
<墳丘の保存状態>			<工作物等>	
非常に良好	◎	墳丘にほとんど削平・崩落等がみられず、良好な保存状態である。	ない	－ 工作物等がない。
良好	○	墳丘の一部に削平・崩落等があるものの、全体に良好な保存状態である。	あり	○ 石垣がある。
やや良好	△	墳丘の盛土が流出し、石室が露出している。	放置された工作物等	△ 利用されていない工作物等（石垣を除く）がある。
半壊	×	墳丘が、1/2 以上は壊れている。	利用されている工作物等	▲ 簡易焼却施設や小屋など利用されている工作物等（石垣を除く）がある。
<石室の保存状態>			<樹木> ※樹木調査成果をもとに下記の判断基準に、個別古墳の状況を加味して判断した。	
非常に良好	◎	石室の石組みに崩落や弱い部分等がみられず、良好な保存状態である。	支障なし	○ 現時点では、概ね古墳に影響がないと判断される。
良好	○	石室の石組みの一部に崩落や弱い部分等があるものの、全体に良好な保存状態である。	注意	△ 古墳に影響がない程度だが、将来「危険」になる可能性がある。 ・幹周り 50～100 cm以上の高木性樹木があり、かつ石室の上により、将来的に大木化で自重による石室圧迫の恐れがあるもの。 ・幹周り 50～100 cmの深根性樹木があり、かつ石室の上により、将来的に根の侵入で石室破壊の恐れがあるもの。 ・幹周り 50 cm未満の枯木があり、将来的に倒木や腐食による墳丘の流出の恐れがあるもの。
やや良好	△	石室の石組みの半分程度に崩落や弱い部分等がみられ、見学にすぐに処置は必要ないが、今後必要である。		
半壊	×	石室の石組みの大半が弱い、あるいは一部でも石室に入るには危険であり、早急に処置が必要である。	危険	× 古墳に影響が出る可能性がある。 ・幹周り 100 cm以上の樹木があり、かつ石室の上により、大木化で自重による石室圧迫の恐れがあるもの。 ・土壌厚 50 cm以下でなおかつ石室の上により根の侵入で石室破壊の恐れがあるもの。 ・幹周り 50 cm以上の枯木があり、倒木や腐食による墳丘の流出の恐れがあるもの。 ・樹木や地被植物が無いことで墳丘上の土壌の流出の恐れがあるもの。
未開口	－	石室は未開口であり、内部を確認することはできない。		

古墳名 (図版番号)	所在地	地目	墳丘規模		石室 形式	石室長 (m)	時期	本質的価値等の特徴	古墳の現状	保存上の課題 (優先的に検討・対処すべき課題は※印)					関係団体による 調査・普及啓発活動	古墳 名板	
			墳丘径 (m)	墳丘高 (m)						墳丘の 保存 状態	石室の 保存 状態	工作物 等	墳丘上 樹木	墳丘			石室
大窪・山畑 6 号墳 (図 3-15、 図 3-16①)	大字大窪 34-1	山林	22.0	4.4	右片袖	7.3	6 世紀 前半	径 22mの円墳。右片袖式の中規模の石室である。高安千塚古墳群でも最古の石室の一つである。	墳丘は北から東はブロック塀があり、西と南は石垣がある。石室は石材が小さく、石室が土圧で傾いている。天井部石材も一部欠失して穴があり、崩落の危険性があるため、平成 19 年度に土嚢で石室開口部を封入している。	×	×	△	○	※土嚢で穴を塞いだ墳頂部の保存処置	※石室崩落保存処置	・八尾市教育委員会が平成 19 年度に測量・実測調査	
大窪・山畑 7 号墳 (抜塚) (図 3-16②)	大字大窪 34-1	山林	30.0 (推定)	6.0 (推定)	右片袖	14 (推定)	6 世紀 末～ 7 世紀 初め	径 30mの円墳。羨道のみ遺存している。巨石を使用しており、本来の玄室の大きさは、高安千塚古墳群の片袖式石室の中でも最大級と推定される。	墳丘の北と東にブロック塀があり、西と南に石垣がある。南東側と北西側に墳丘土流出のため、市教委により土嚢積みとブルーシートで養生している。石室は比較的良好だが、墳丘盛土流出による雨水の浸み出しがある。	×	○	△	○	※表土流出保護処置		・八尾市教育委員会が平成 19 年度に測量・実測調査 ・平成 19 年度から普及冊子に見学できる古墳として紹介 ・八尾市教育委員会のボランティア活動にて土嚢積みとブルーシートで養生	○
大窪・山畑 27 号墳 (俊徳丸鏡塚古墳) (図 3-16④・ ⑤)	大字大窪 1175-36	宅地	15.0	4.7	右片袖	7	6 世紀 後葉	径 15mの円墳。中規模の右片袖式石室である。「俊徳丸」伝承地であり、歌舞伎役者寄進の石造物がある。文学史跡としても重要である。	墳丘周囲は削平されており、また石垣がある。墳丘北東部に石段あり。石室開口部付近と南東隅に石造物あり。墳頂部の一部が陥没している。石室内に石塔あり。石室は雨水の浸み込みが著しく、墳頂部の陥没状態から天井石付近の盛土が流出している可能性がある。	○	△	△	○	※墳頂部陥没部分及び石室崩落部分保護処置 (石室立入禁止の表示)		・八尾市教育委員会が平成 13 年度に測量調査 ・平成 19 年度から普及冊子に見学できる古墳として紹介 ・八尾市教育委員会のボランティア活動にて清掃や草刈りを実施	○

第3節 郡川北支群

(1) 支群の概要

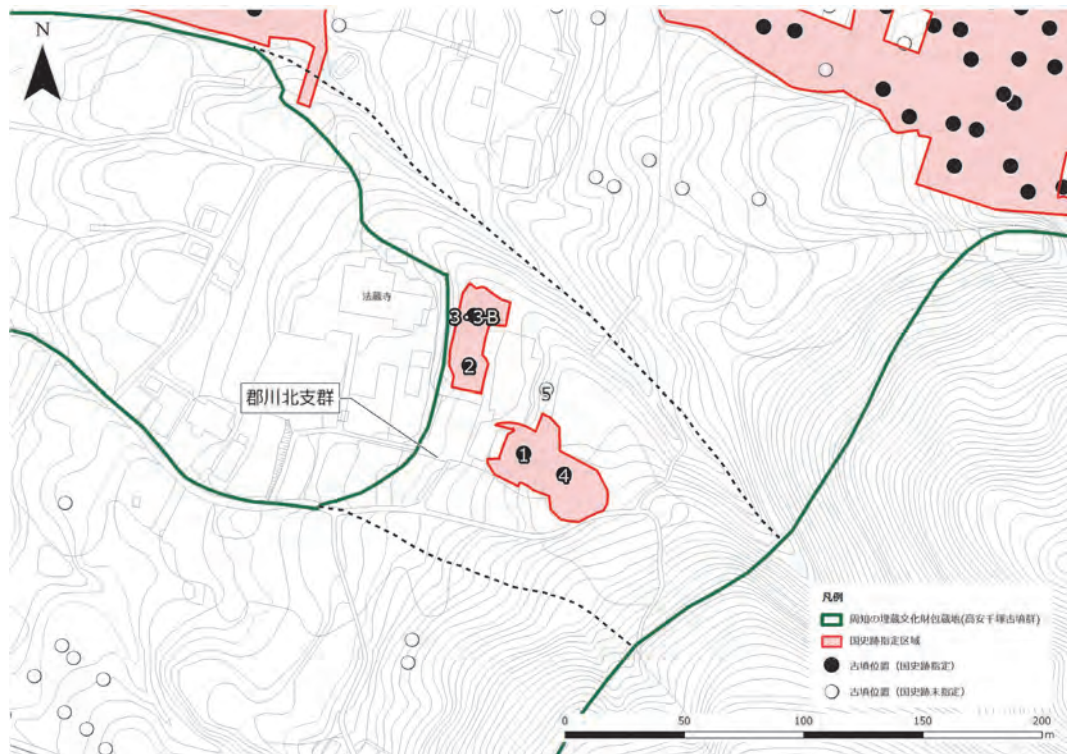


図 3-17 郡川北支群 古墳分布図

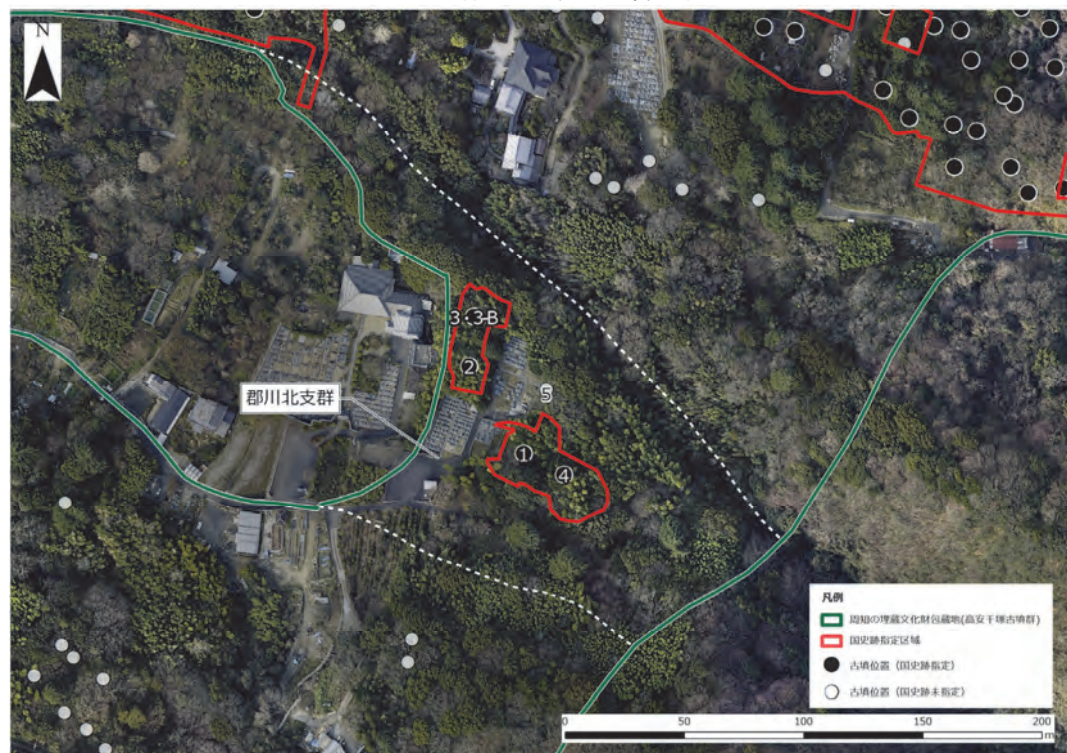


図 3-18 郡川北支群 航空写真（平成 28 年 1 月撮影）

郡川北支群は、松尾谷の南側の開析扇状地（段丘状）に位置する。法蔵寺境内を中心とし、約 1.8 万 m²の範囲に松尾谷に面した北西方向に延びる尾根上にまとまった現状 6 基の古墳で構成される小支群である。支群は山腹のやや高所に立地し、西側に大阪平野を一望することができる。

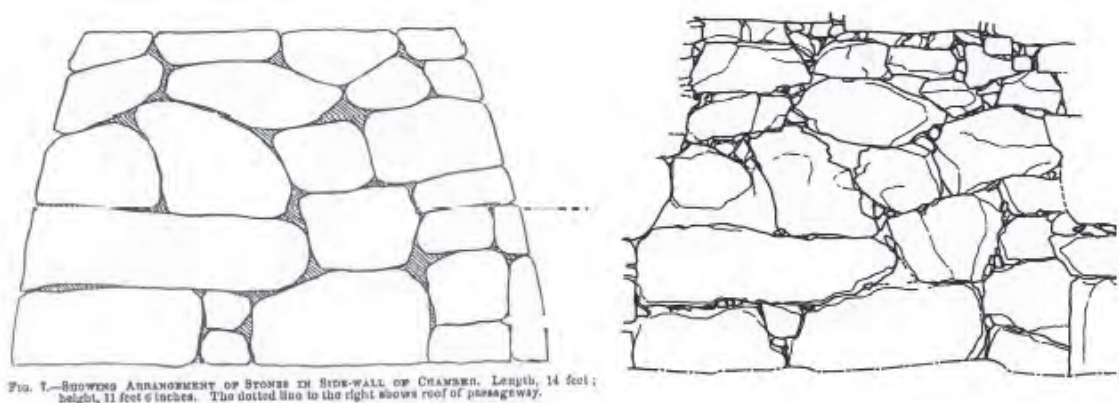
境内東側の墓地とその周囲の樹林地にある郡川 1 号墳、2 号墳、3 号墳、3-B 号墳、4 号墳の計 5 基が史跡指定の古墳である。郡川 1 号墳は、「開山塚古墳」とも呼ばれ、6 世紀中葉に造られた高安千塚古墳群最大級の石室である。その後、6 世紀後半に 3 号墳と 2 号墳、次いで 7 世紀前半には 3 号墳の墳丘裾に 3-B 号墳が造られるなど、代々にわたる時期の古墳がみられる。

法蔵寺境内にある古墳（洞穴状に 7 基の古墳が描かれている）として、江戸時代（享和元年：1801 年）の『河内名所図会』に紹介され、さらに明治時代にモースが現地調査し、詳細な実測図を残した著名な支群である。

（２）史跡指定地の状況

指定面積は 1,819.83 m²である。支群内で指定された古墳の概要は表 3-3 のとおりとなる。支群を構成する 6 基の古墳のうち、法蔵寺境内にある寺院建物や墓地等以外で現状保存の可能な範囲にある 5 基を史跡指定している。

活用については、見学可能な郡川 1 号墳（開山塚古墳）を、高安千塚古墳群の普及冊子に紹介し、古墳の入口には史跡指定の標柱を設置している。また、法蔵寺の山門横には郡川北支群についての説明板を設置している。



出典：EDWARD S. MORSE 1880 DOLMENS IN JAPAN THE POPULAR SCIENCE MONTHLY vol. XVI (佐野隆弥・田中一廣訳・校註 1991 E・S・モース「日本におけるドルメン」『花園史学』第12号)

図 3-19 モースが描いた開山塚古墳の左側壁のスケッチ（左）と実測図（右）



①郡川 1 号墳（開山塚古墳）



②郡川 2 号墳



③郡川 3 号墳



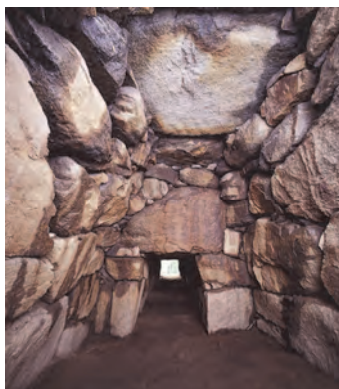
④郡川 4 号墳（石塔の背面の樹林が古墳）



⑤郡川北支群 史跡説明板



⑥郡川 1 号墳 史跡指定標柱



⑦郡川 1 号墳の玄室



⑧郡川 1 号墳の左側壁

図 3-20 郡川北支群の現状

表 3-3 郡川北支群 史跡指定地の古墳

凡例				
<墳丘の保存状態>			<工作物等>	
非常に良好	◎	墳丘にほとんど削平・崩落等がみられず、良好な保存状態である。	ない	－ 工作物等がない。
良好	○	墳丘一部に削平・崩落等があるものの、全体に良好な保存状態である。	あり	○ 石垣がある。
やや良好	△	墳丘の盛土が流出し、石室が露出している。	放置された工作物等	△ 利用されていない工作物等（石垣を除く）がある。
半壊	×	墳丘が、1/2 以上は壊れている。	利用されている工作物等	▲ 簡易焼却施設や小屋など利用されている工作物等（石垣を除く）がある。
<石室の保存状態>			<樹木> ※樹木調査成果をもとに下記の判断基準に、個別古墳の状況を加味して判断した。	
非常に良好	◎	石室の石組みに崩落や弱い部分等がみられず、良好な保存状態である。	支障なし	○ 現時点では、概ね古墳に影響がないと判断される。
良好	○	石室の石組みの一部に崩落や弱い部分等があるものの、全体に良好な保存状態である。	注意	△ 古墳に影響がない程度だが、将来「危険」になる可能性がある。 ・幹周り 50～100 cm以上の高木性樹木があり、かつ石室の上により、将来的に大木化で自重による石室圧迫の恐れがあるもの。 ・幹周り 50～100 cmの深根性樹木があり、かつ石室の上により、将来的に根の侵入で石室破壊の恐れがあるもの。 ・幹周り 50 cm未満の枯木があり、将来的に倒木や腐食による墳丘の流出の恐れがあるもの。
やや良好	△	石室の石組みの半分程度に崩落や弱い部分等がみられ、見学にすぐに処置は必要ないが、今後必要である。		
半壊	×	石室の石組みの大半が弱い、あるいは一部でも石室に入るには危険であり、早急に処置が必要である。	危険	× 古墳に影響が出る可能性がある。 ・幹周り 100 cm以上の樹木があり、かつ石室の上により、大木化で自重による石室圧迫の恐れがあるもの。 ・土壌厚 50 cm以下でなおかつ石室の上により根の侵入で石室破壊の恐れがあるもの。 ・幹周り 50 cm以上の枯木があり、倒木や腐食による墳丘の流出の恐れがあるもの。 ・樹木や地被植物が無いことで墳丘上の土壌の流出の恐れがあるもの。
未開口	－	石室は未開口であり、内部を確認することはできない。		

古墳名 (図版番号)	所在地	地目	墳丘規模		石室 形式	石室長 (m)	時期	本質的価値等の特徴	古墳の現状	保存上の課題 (優先的に検討・対処すべき課題は※印)				関係団体による 調査・普及啓発活動	古墳 名板	
			墳丘径 (m)	墳丘高 (m)						墳丘の 保存 状態	石室の 保存 状態	工作物 等	墳丘上 樹木			墳丘
郡川 1 号墳 (開山塚古墳) (図 3-20①⑥⑦⑧)	郡川 6 丁目 1	山林	30.0	5.8	両袖	13.05	6 世紀 中葉	径 30mの円墳。高安千塚古墳群の中で最大規模の両袖式石室である。明治 12 年に米国人博物学者 E・S・モースが調査し、スケッチを残した石室として学史上も重要である。	墳頂部は、法蔵寺の開山である好山和尚の廟塔清凉塔の前にある歴代住職の墓地である。西側には石段がある。石室の状態は良好である。羨道右側壁の開口部付近が土圧により石材が押され、石材が一部崩落している。墳丘上に樹木がある。	○	○	▲	△	※羨道右側壁の開口部付近崩落処置	・八尾市教育委員会 が平成 16 年度に測 量・実測調査 ・平成 19 年度から普 及冊子に見学できる 古墳として紹介	○
郡川 2 号墳 (図 3-20②)	郡川 6 丁目 2	墓地	14.0	4.3	右片袖	7.5	6 世紀 後葉	径 14mの円墳。中規模の右片袖式石室である。発掘調査により石棺片や土器片が出土している。	墳頂部は、江戸時代からある祠(覆屋あり)がある。墳丘は北から西が削平され、道となっている。石室は良好に遺存している。墳丘上に竹などの樹木がある。開口部や石室近くにも竹あり。	○	○	▲	×	・開口部付近の竹 の整理伐の検討	・八尾市教育委員会 が昭和 58 年度に測 量・実測調査	
郡川 3 号墳 (図 3-20③)	郡川 6 丁目 1	山林	15.0	4.6	両袖	9.7	6 世紀 後葉	径 15mの円墳。中規模の両袖式石室である。発掘調査により須恵器片が出土している。	墳丘南西側にタンクあり。墳丘北から西側の一部は削平されている。西側に石垣あり。墳丘上に竹やその他の樹木がある。石室見上げ石上に大木あり。北西側の樹木は大木化している。石室は良好である。	○	○	▲	×	・樹木の整理伐の 検討 ・表土流出保護処 置の検討	・八尾市教育委員会 が昭和 58 年度に測 量・実測調査	
郡川 3-B 号墳 (図 3-20③)	郡川 6 丁目 1	山林			無袖	4.5	7 世紀 前半	郡川 3 号墳に付設して造られた無袖式石室である。木棺に伴う鉄釘や土器が出土している。	郡川 3 号墳と同一墳丘。石室は発掘調査により確認されたもので、現在は埋め戻されている。	○	○	▲	×	・樹木の整理伐の 検討 ・表土流出保護処 置の検討	・八尾市教育委員会 が昭和 58 年度に測 量・実測調査	
郡川 4 号墳 (図 3-20④)	郡川 6 丁目 1	山林	23.0	5.5～ 6.0	不明	8 前後 (推定)	6 世紀 後葉	径 23mの円墳。玄室手前から羨道は流入土により埋没している。郡川 3 号墳に次いで造られたとみられる。墳丘上に法蔵寺開山の好山和尚の廟塔といわれている清凉塔がある。	墳丘西端は、法蔵寺の開山である江戸時代につくられた好山和尚の廟塔清凉塔に伴う石垣がある。墳丘北から東側部分は、削平されており、北側には石垣がある。石室は玄室奥側付近を除いて埋没している。墳丘上に竹他の樹木がある。	○	○	▲	△	・表土流出保護処 置の検討 ・樹木整理伐等の 検討	・八尾市教育委員会 が平成 17 年度に測 量・実測調査	

第4節 郡川南支群

(1) 支群の概要

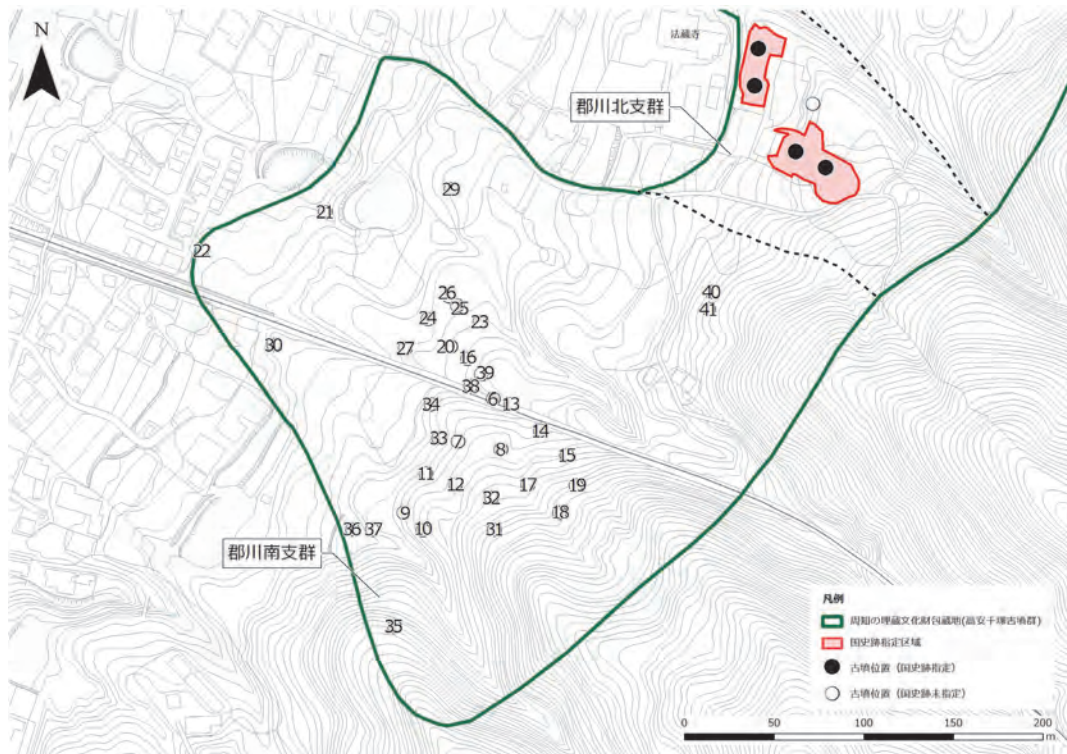


図 3-21 郡川南支群 古墳分布



図 3-22 郡川南支群航空写真（平成 28 年 1 月撮影）

郡川南支群は、郡川北支群と郡川南支群を隔てる谷筋を流れる北の南谷と南の荒川にはさまれた尾根上に、高安山麓の急傾斜面と住宅市街地の間の狭い開析扇状地の上の約 7.5 万㎡の範囲に 37 基の古墳が分布している。

支群中央部を近鉄信貴山口駅と高安山駅を結ぶ西信貴ケーブルが走り、支群が南北に分断されている。西信貴ケーブルの北側では、古墳が分布する植木畑が標高の高いところまで階段状に連なっている。西信貴ケーブルの南側は、竹林や既存木からなる樹林地と樹木畑の植木等が混在している。また、一部の古墳が、寺院境内の墓地に残っている。

高安千塚古墳群で最も早く造墓が開始された支群で、韓式系土器やミニチュア炊飯具が出土した郡川 16 号墳や、服部川支群の二室塚古墳のように、二つの石室をつなげた構造の郡川 11 号墳（交互二室塚古墳）がある。

郡川南支群は、現在未指定の支群であるが、特徴的な古墳も数多くある。これまでの分布調査を踏まえ、史跡指定に向け、墳丘及び石室の状況を把握するための測量調査等の実施が必要である。



郡川 16 号墳



郡川 35 号墳



郡川 30 号墳（墓地内の古墳）



支群の中央を抜ける西信貴ケーブル

図 3-23 郡川南支群の現状